

# ムービー・エッセイ

これだけは見逃せない邦画・洋画セレクション

## 刈辺 俊一



### ニューシネマ・パラダイス

アルフレードが死んだ。映画「ニューシネマパラダイス」で、映写技師のアルフレードを演じたフランス映画界屈指の名優フリップ・ノワレが、2006年11月23日に亡くなった。76才だった。実は、1989年制作の、この映画の冒頭も、このアルフレード死去の知らせから始まる。故郷シチリアの小さな村、ジャンカルド村からローマに出てきて、映画監督として大成した

ただでは飽きたらず映写室に忍び込んで、アルフレードに怒られていた。しかし、戦争で父を亡くしたトトと、子供のいないアルフレードとの間に、やがて不思議な親子の情にも似た感情が芽生えていく。そして、いつしか映写技師にあげられる様になっていくトトに、「お前にはさせたくない辛い仕事だ。同じ映画を100回も見るとどぞ、それも、いつも」と

渡される。フィルムに託された彼のメッセージとは？ この映画史上に輝くラストシーンの素晴らしい言葉を説明することは出来ない。恐らく、こんな映画を一本作れたら死んでも良いなどと口走った映画青年は世界に「ごまん」といった筈だ。私も、そんな一人だった。鑑賞するだけで飽きたらず、いつの日か、この手で名作をなすと、身の程知らずの夢を抱いていた私は、この映画に完全に打ちのめされた。ところで名作を見た後も人を悩ませるものらしい。トトの母親は偏母した息子にこういう。「お前に電話すると、いつも違った女の人が出るけど、誰もお前を愛していないことがお母さんには分かる。」この母親の言葉の意味する事は何か？ 何故わざわざ、このセリフを登場させるのか？ それは、単にトトのエレナへの変わらぬ愛を示しているのか、それともトトの才能と性格を見抜いていたアルフレードが、心を鬼にしてローマに追いやりはしたが、断ち切れぬエレナへの想い故に、愛の不毛に生きるトトの寂しさも同時に憂いていた事を暗示しているのではないか？ 何故なら、その寂しさは最愛のトトを失うアルフレード自身の寂しさにも通じていたのだから。そう解釈すれば、ラストシーンはトトに、「辛かっただろう。良く頑張った。ご褒美だよ。」とも思えて更に味わいが深まるのである。

夢はいつか覚めるのだ。」そして、「とにかく、この村を出る。二度と帰ってくるな。手紙も書くな。自分のする事を愛すのだ。」と、まるで自分が果たせなかった夢をトトに託すかのように。トトは、その言葉通りにローマへ出て大成する。アルフレードの葬儀に30年ぶりに帰ってきたノスタルジー溢れる故郷で、トトはアルフレードの妻から形見のフィルムを

「恋愛は幻想だ。物語は終わる。」銀行家のエレナの両親はそれを許さず、お互いの誤解もあって二人は別離を余儀なくされる。そうした失意のある日、アルフレードがトトに言う。「恋愛は幻想だ。物語は終わる。」

全自動軟水機他水処理機器製造販売  
代表者 宮里 栄秀  
〒901-2131 沖縄県浦添市牧港4丁目7番7号  
TEL (098) 876-2045 FAX (098) 876-0328  
http://www.sakae-group.com



# 合資会社 栄産業

1989年作、イタリヤ、監督・脚本 ジュゼッペ、トルナトーレ

サルバトーレは、ジャンカルド村に住んでるとき、父とも暮っていたアルフレードの死んだ事を村に住む母からの電話で知らされる。物語は、ここからサルバトーレのシチリアの少年時代の回想へと続く。

映画が娯楽の王様だった時代、ジャンカルド村に一軒だけある映画館パラダイス座は、連日の大盛況。トトの愛称で呼ばれていたサルバトーレは大の映画ファンで、見

アルフレードの葬儀に30年ぶりに帰ってきたノスタルジー溢れる故郷で、トトはアルフレードの妻から形見のフィルムを